

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第 27 号



2021年2月28日発行
発行責任者 岡田守弘
芳川玲子
〒259-1292
平塚市北金目4-1-1
東海大学文学部心理・社会学科
「芳川玲子」研究室

令和2年度神奈川支部総会 報告

今年度の総会は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、書面開催としました。また、本来は役員改選の年でしたが、混乱を避けるため1年延長させていただきました。

<議事>

- (1) 第1号議案 2019年度事業報告並びに決算・監査報告・・・・・・・・承認
- (2) 第2号議案 2020年度事業計画案並びに予算案について・・・・・・・・承認
- (3) その他
 - ① 『神奈川支部の20周年記念行事』について検討する。
 - ② 電子媒体での情報発信について検討する。

第54回研修会報告

日時 2020年10月25日(日)
場所 ユニコムプラザさがみはら
(Zoomによる同時配信実施)

シンポジウム「学校及び学校心理士はコロナとどう向き合うか」

■小学校の視点から

上杉忠司先生(川崎市立三田小学校)

1 子どもたちへの心理的アプローチ

○子どもの心理的状況を想像する

休業期間中に職員研修を行い、グループごとに長期休業中の子どもたちの気持ちについて話し合ってもらった。それを基に、学校再開後の支援に備えた。

○心を繋ぐプロジェクト

休業期間の配付課題に友達へのメッセージカードを入れ、会えない子ども同士の心と心を少しでも繋げようと試みた。

○主体的に「新しい学校生活スタイル」を身に付けさせる

学校再開前に「新しい学校生活スタイル」の動画をYouTubeで配信し、学校再開時には、マスク着用や手洗いやソーシャルディスタンスの視覚的ポスターをたくさん掲示

することで、子どもが自分から身に付けられる様にした。

2 教職員への心理的アプローチ

- 管理職リーダーシップ型から教師一人一人が考える自律型の学校運営へ
学校独自のロードマップを作成し、それに基づき各担当が見通しをもって指導計画を立案できるようにした。
- 若手教員への心理的支援（Zoomによるカタリ場）
在宅勤務を受け、一人暮らしの若手教員が不安等を語り合える場を設けた。

■中学校の視点から

和田智司先生(二宮町立二宮西中学校)

1 生徒の心をとらえる（4回の面談とアンケートの実施）

- 学校再開後「教育相談」の案内を配付し、相談したい教員との面談を直ちに実施した。
- 7/1に「いじめ等のアンケート」を、生徒・保護者対象に実施した。
- 夏休み明け直後の3日間で、担任と生徒の「教育相談」を実施した。
- 9/28～10/1に、担任・生徒・保護者との三者面談を実施した。
- 全校生徒との校長面接を実施した。

2 生徒間の心をつなぐ（「いいところ調べ」の実施）



行事等を通して発見したクラスの仲間のいいところを書き、それを切り取り本人に渡す。集まった自分に関するカードを、台紙に貼る。集まったカードを読んだ感想を書く。自宅に持ち帰り、保護者にも見てもらいコメントを書いてもらう。担任からもコメントを入れ、本人に返却する。保護者からのコメントを、クラス全体の生徒や保護者に還元する。

3 学校と保護者そして地域との信頼関係の構築

(学校からの迅速かつ積極的な情報発信の実践)

- 学校HPの有効活用
「毎日の学校の様子等のブログ」「毎日の給食」「各教科からのスライド教材」「各学年、進路等」を配信した。
- 生徒情報の共有とその対応、そして保護者との連携
生徒指導連絡会を柱とした情報共有と、具体的な対応策の構築を進めた。また、家庭訪問を中心に、保護者への情報提供と具体的な対応の共有を行った。

■高等学校の視点から

春日彰先生(神奈川県立城山高等学校)

1 新型コロナウイルス感染症の影響

- 学習への影響
休業中は専ら課題対応となったが、課題に取り組めない生徒は、学校に呼んで指導した。
- 学校行事への影響
高校生活最後の行事や部活動が大幅に制限され、特に3年生の落胆は大きかった。
- 進路活動への影響
職場見学や学校説明会がないことや、家庭の経済的状況の変化による不安が大きかった。
- 生徒の心理面への影響
様々な制限があることによるストレス、感染や将来に対する不安、行事が縮小され授業

だけの学校生活への閉塞感等、生徒の心理面への影響が心配である。

○教師たちの消耗

感染対策やオンライン授業・課題への対応等、負担が大きい。生徒や自分自身が感染への不安で戦々恐々としている。

2 コロナ禍において学校心理士に期待すること

○対面型とオンライン型のハイブリッド（学校に行かなくても学べる環境づくり）

○双方向型オンラインでの関わりのスキル研修

○予測不可能な今を生き抜くための個への配慮と対話

○社会に出られないことへの孤独感に向き合う

○学校再開時の支援体制づくり、再開時のプログラム

■特別支援学校の視点から

泉原恭子先生(神奈川県立秦野養護学校)

1 学校運営上の取り組み

○各部門課程の連携…team や Zoom 会議の活用

○多種多様な障害の児童生徒に合わせた指導…多角的アプローチ 新入生に対する対応

○在籍する病院、施設、小学校との協働…定期連絡会での情報交換 インクルーシブ教育の推進

○家庭との連携…定期的な電話連絡・文書送付 臨時休校・分散登校中の居場所づくり

○心理的ケア

2 学習保障について

○学校ホームページに「いぶきちゃんの部屋」を開設…映像や教材を配信

○オンライン授業の実施…Google Classroom や Zoom の活用

○プリントやDVDの配付

○病院での学習…学校と病院とをICTでつなぎ、遠隔授業を行った。

3 関係機関との連携

施設や病院、小学校敷地内校舎との会議で、これまで以上に細かい打ち合わせを行った。

4 課題

教員の共通理解や授業時数の確保、保護者の理解等が挙げられる。感染対策については、医療ケアが必要な児童生徒もいるので、徹底的に行うことが求められる。

5 特別支援学校ができたこと

一人の教員が担当する児童生徒が少ないので、ゆっくり丁寧に関わることで不安を軽減できた。臨時休業中の時間を、十分に活用できた。分散登校も緩やかに進められ、新入生の安心につながった。

■大学の視点から

大里朝彦先生(相模女子大学)

1 学長のメッセージから読む現状と課題

○現状報告と学長の思い

大学は3/1から6/8まで閉鎖となった(学生入構禁止)。授業開始は5/7だが、全てオンライン授業。15週を12週に短縮。対面授業は、演習・実習が7月下旬から9月にかけて実施された。教職センターは採用試験に備え、6/18から対面指導が可能となった(ただし少人数)。

○秋学期の予定と見通し

10/13からの秋学期もオンライン授業を中心に行うが、一部対面型も導入する。

○現在の課題と方向性

多くの大学で学生から学費返還等の要求が出されたが、本学では返還・給付等を行わない。1年生に対してはキャンパスツアー一日を設定し、9月末にガイダンスを実施した。

○具体的な対応策

シラバスを修正し、8割の授業がオンラインとなった。学生を支援するため、機器の貸し出しや施設の整備を行った。教科書注文のオンライン受付も対応した。

○今後の見通しと学生へのメッセージ

週に2回、理事から「新型コロナウイルス情報」が全教職員に配信される。今後の状況を見据えての対応や、各自の自覚と覚悟が必要なことを呼びかけている。

2 学校心理士としてできること

○リモートによる相談、対面による個別相談、カウンセリング（学生の心理面のケア）

○個別の学習・就労支援（教員採用試験対策としてZoom面接練習、メールでの論作文指導）

○教職課程関係各課との情報共有、連携

■教育委員会の視点から

佐藤弘幸先生(厚木市教育委員会)

1 厚木市の新型コロナウイルス感染に係る対応経緯（抜粋）

○4～5月…臨時休業中、医療従事者等の児童の対応をどうするかが課題となった。教育委員会と市長部局で連携して全小学校に自学・自習室を設置し、午前中は教員が対応し午後は学童保育に引き継いだ。アルコール消毒薬の欠品を受け、次亜塩素酸水の精製器を企業の協力を得て各校に1台配置した。要就学援助家庭への給付金の対応も行った。

○6月…学校再開にあたり、厚木市独自の「新しい学校の生活様式」基準を作成。また、登校後発熱した子どもに対応するための「第2保健室」を設置した。

○8月…小学校で20人規模のクラスターが発生した。小中学校の修学旅行を中止としたが、2000万円以上となるキャンセル料を、行政が負担するよう対応を図った。

2 対応すべき主な課題

○財政出動の要請

行政が担うべき課題。学校に必要な物品の把握、購入経路の確保等に時間を費やした。

○学校への対応

多くの案件のうち最も苦慮したのは、日本語が不自由な児童生徒・保護者の対応だった。

○地域への対応（学校心理学の視点で）

保護者や地域への対応の際、学校心理学の元となる「地域精神衛生」や「コミュニティ心理学」を意識した。これらを基本とし、感染者が出た学校名を公表して地域へのリスクを周知した。地域からは不安も出てくるが、厚木市では全校にコミュニティスクールがあり、コーディネーター役の方が活躍してくれた。そこに向向いて正確な情報をお知らせした。混乱を最小限に留めながら、コロナ禍の学校教育を進めている。

[編集後記] 2020年度は、新型コロナウイルス感染症に振り回された1年となりました。神奈川支部では総会は紙面開催としましたが、10月の研修会は会場での開催とオンライン開催とのハイブリッドで行うことができました。コロナ禍で学校心理士は何ができるのかという大きな課題に、来年度も取り組んでまいります。 ryoshi@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp（編集部）